

記録
ビデオ
カラー／37分

- 企画
(社) 日本看護協会
- 監修
厚生省
- 協力
サンテレビジョン
NHKサービスセンター
カジマビジョン

スタッフ

- 製作
福岡順子
- 脚本・演出
村山正実
- 撮影
中井正義
- 録音スタジオ
テレトップ
- 選曲
山崎 宏
- 解説
細田百合子

文部省選定 1996年教育映像祭優秀作品賞
(財) 健康・体力づくり事業財団推薦

1995年1月17日の未明に襲った阪神・淡路大震災。その時、その後、保健婦たちはどのように活動したのか。応援の派遣保健婦や医療チームは、多くのボランティアらとの協力態勢をとりながら、各地区の状況に応じた救援活動を手さぐりで進めていった。震災直後から4ヵ月後に至るまでの保健婦の活動と証言を記録した。



阪神・淡路大震災が発生した際、多くの保健婦たちは自身も被災者となりながら、避難所での救護活動に追われた。医療機関の多くが倒壊する中、避難所となった保健所では、詰めかけた負傷者や患者の対応に忙殺された。

そこでの初期活動は、被災者の健康チェックや健康相談を行い、インフルエンザや慢性疾患患者への対応にも尽力した。混乱する状況の中で、長田保健所では応援の医療チームやボランティアたちを集め、保健婦がリーダーシップをとって朝晩合同ミーティングを開き、情報交換をした。西宮保健所では巡回保健相談を、東灘保健所ではパソコンを使って情報センターを設置し、在宅者の安否を確かめ、ニーズを把握し、訪問を開始した。須磨保健所は調整本部を設置して、全国から派遣された保健婦たちも地元の保健婦たちと連携をとりながら、被災者支援活動を展開した。

救援活動が一段落すると、保健婦たちは被災者のケアや避難所の環境整備に注力し、訪問看護婦と連携して訪問指導などを行っていった。保健婦たちは大震災というショックや避難所生活が長引くことも重なって、心のケアの必要性が増していく中で活動を続けていく。この災害時の保健婦たちの経験は、今後の保健活動に貴重な体験としていかされていくことだろう。